

う ち ゅ う ひ と は
宇宙 パティシエール 妃斗葉 1 さく たかはしとも こ
作 高橋倫子

だい わ ねんかん こうへん
第 2 話 200 年間のプロローグ (後編)

カメラ ^{かか}を抱えてコスモス ^{ぼたけ}畑 ^いに行く。好きな ^すポジションは ^{ぎやっこう}逆光。
^ひ陽 ^{とお}を通す ^{うす}薄い ^{はな}ピンク ^ひの花 ^ひびらが、^ひ陽 ^{さえぎ}を ^こ遮 ^{はな}る ^{はな}濃い ^{はな}ピンク ^{はな}の花 ^{はな}びらの
^{ふか}深 ^{いっそうしん}さを ^{びてき}一層 ^{うつ}神秘的 ^だに ^だ写 ^だし ^だ出 ^だす。

^{みんな}皆 ^{おな}と ^す同じ ^{みんな}は ^ひ好き ^ひじゃ ^{とお}ない。 ^{うす}皆 ^{かれん}が ^{はな}陽 ^{はな}を通 ^{きづ}す ^{きづ}薄 ^{きづ}い ^{きづ}可 ^{きづ}憐 ^{きづ}な ^{きづ}花 ^{きづ}び ^{きづ}ら ^{きづ}で
^{じぶん}ある ^{はざま}なら、 ^{そんざい}自分 ^{ふか}はその ^こ狭 ^{ぶぶん}間 ^{きづ}に ^{きづ}存在 ^{きづ}する ^{きづ}深 ^{きづ}くて ^{きづ}濃 ^{きづ}い ^{きづ}部分 ^{きづ}、 ^{きづ}気 ^{きづ}付 ^{きづ}かれ ^{きづ}る
^{すく}ことは ^な少 ^{なに}ない ^たけれど ^{そんざい}も ^{そんざい}無 ^{そんざい}いと ^{そんざい}何 ^{そんざい}かが ^{そんざい}足 ^{そんざい}り ^{そんざい}ない、 ^{そんざい}そ ^{そんざい}んな ^{そんざい}存在 ^{そんざい}であ ^{そんざい}り
^ひたい。 ^ひだけ ^ひど、 ^ひ陽 ^ひを通 ^ひす ^ひつて ^ひど ^ひう ^ひい ^ひう ^ひこ ^ひと ^ひな ^ひの ^ひか ^ひも ^ひいつ ^ひか ^ひは ^ひ知 ^ひり
^{ぶぶん}たい。 ^ひある ^ひ部分 ^ひでは ^ひ陽 ^ひを通 ^ひす ^ひ存在 ^ひが ^ひ自分 ^ひの ^ひ様 ^ひな ^ひ存在 ^ひを ^ひ引 ^ひき ^ひ立 ^ひた ^ひせ
^{きづ}て ^{きづ}く ^{きづ}れ ^{きづ}て ^{きづ}い ^{きづ}る ^{きづ}こ ^{きづ}と ^{きづ}も ^{きづ}気 ^{きづ}付 ^{きづ}い ^{きづ}て ^{きづ}い ^{きづ}る ^{きづ}。

^{こうこうせい}高 ^{かくとく}校 ^{かんが}生 ^{かんが}の ^{かんが}う ^{かんが}ち ^{かんが}に ^{かんが}獲 ^{かんが}得 ^{かんが}して ^{かんが}お ^{かんが}か ^{かんが}な ^{かんが}け ^{かんが}れ ^{かんが}ば ^{かんが}と ^{かんが}考 ^{かんが}え ^{かんが}て ^{かんが}い ^{かんが}た ^{かんが}アイ ^{かんが}テム、
^ほどう ^{おも}しても ^{みやじまちゅうぐんせい}欲 ^かしい ^{だいがく}と思 ^{だいがく}つ ^{だいがく}て ^{だいがく}い ^{だいがく}た ^{だいがく}アイ ^{だいがく}テム、^{だいがく}「^{だいがく}宮 ^{だいがく}島 ^{だいがく}宙 ^{だいがく}軍 ^{だいがく}製 ^{だいがく}菓 ^{だいがく}大 ^{だいがく}学 ^{だいがく}へ
^{きつ}の ^て切 ^い符 ^い」 ^いは ^い手 ^いに ^い入 ^いれた。 ^いだけ ^いど、 ^いそ ^いこ ^いから ^い先 ^いの ^いこ ^いと ^いは ^い正 ^い直 ^いほ ^いと ^いん
^{かんが}ど ^{かんが}考 ^{かんが}え ^{かんが}て ^{かんが}い ^{かんが}な ^{かんが}か ^{かんが}つ ^{かんが}た ^{かんが}。 ^{かんが}考 ^{かんが}え ^{かんが}て ^{かんが}い ^{かんが}た ^{かんが}つ ^{かんが}も ^{かんが}り ^{かんが}だ ^{かんが}つ ^{かんが}た ^{かんが}け ^{かんが}れ ^{かんが}ど ^{かんが}も ^{かんが}「^{かんが}つ ^{かんが}も
^なり ^な」 ^なだ ^なけ ^なだ ^なつ ^なつ ^なた ^な…… ^なつ ^なて ^なこ ^なと ^なが ^なよ ^なく ^な分 ^なか ^なる ^なよ ^なう ^なな ^なつ ^なた。 ^な妃 ^な斗 ^な葉 ^な
^なの ^な中 ^なで ^な何 ^なか ^なが ^なぶ ^なつ ^なり ^なと ^な切 ^なれ ^なて ^なし ^なま ^なつ ^なつ ^なて ^ない ^なた。 ^な何 ^なか ^なこ ^なう、 ^な無 ^な理 ^な矢 ^な理 ^なに
^{じぶん}でも ^せ自分 ^おの ^お背 ^お中 ^おを ^おポ ^おン ^おと ^お押 ^おし ^おて ^おく ^おれ ^おる ^およ ^おう ^おな、 ^お強 ^お制 ^お的 ^おに ^お引 ^おつ ^お張 ^おつ
^なて ^なつ ^なつ ^なも ^なら ^なえ ^なる ^なよ ^なう ^なな、 ^なそ ^なん ^なな ^な何 ^なか ^なが ^な欲 ^なし ^なか ^なつ ^なた。

なかま い ともだち い おも そうだん
仲間は居るけれども友達は居ない。……と思っていた。相談でき
ひと い ほんとう い
る人は居なかった。ひよつとすると本当は居たのかもしれない。
い おも い おも ほう ここち よ
でも、居ないと思っていた。居ないと思っっている方が心地良かつ
ほんね だ ひとは なか あ え
た。本音をさらけ出して……なんて妃斗葉の中では在り得ない。
ほんね だ じぶん なか から
本音をさらけ出してしまったら、自分の中が空っぽになってしま
じぶん じぶん な ひとは
う。自分が自分では無くなってしま。それが妃斗葉だった。

ことし ふ ひとは しゃしん
今年のコスモスがアルバムに増える。妃斗葉の写真はいつもア
よ でん しざっし ひかくとくしゅう
ンダーだ。よく読む電子雑誌にカメラの比較特集があった。カメ
こと し ころ うつ この えら
ラの事をよく知らなかった頃、写りの好みだけで選んだカメラだ
あと し うつ
ったが、後になって知ったところによると、それがアンダーに写る
よ し あぎ す
ことで良く知られているモデルだった。あんまり鮮やか過ぎるの
この あぎ す せつ ことし
は好みじゃない。鮮やか過ぎると切なくなる。今年のコスモスは
あぎ かん きょねん なに か
アンダーでも鮮やかに感じた。去年までと何も変わらないはずな
なに せつ か こう なが
のに、だけど何か切ない。セピアに加工。しばらく眺める。

ほう
(この方がいい……)

ひとは もくひょう みうしな みうしな
妃斗葉は目標を見失いそうだった。見失ってしまわないよう
ひっし ほんとう しょくひんかんけい すす
に必死だった。本当は食関係になんて進むつもりじゃなかった。
しょくひんかんけい いちばんすす りょうり で き
食関係になんて一番進みたくなかった。料理は出来なくはな
す ふだん りょうり す
いけど好きじゃない。普段の料理でさえ好きじゃないのに、お
か しづく しゅみ か ししょくにん
菓子作り、しかも趣味でというのではなく、菓子職人になるため
ようせい う しんろ えら
の養成を受けるだなんて、どうしてそんな進路を選んでしまった
みずしませんせい すす あんぜんけん
のだろう。やっぱり水嶋先生が勧めてくれたように、安全圏の

り こうけいだいがく め ぎ よ
理工系大学を目指してみれば良かったのだろうか。そんなことば
かんが
かり 考えていた。

じつ いち ど りょうしん はな
実は一度だけ 両親にそれとなく話してみたことがあった。「な
や こと ば ちち ひらて と き
ら辞めてしまえ！」という言葉とともに、父の平手が飛んで来た。
こま ゆうふく かけい しんがく はは
困ってはいないが裕福でもない家計をやりくりしての進学。母へ
やさ むすめ ちち き も わ
の優しさ。そこへもって娘のわがまま。父の気持ちはよく分かっ
ていた。母は期日に間に合うように入 学手続きを進めてくれた。
あたま わ こころ
頭ではよく分かっていたけれど、心はそうではなかった。いっ
こと はは にゅうがくてつづ わす
その事、母が 入学手続きを忘れてしまえばいい……。そんな事を
おも ちち ひらて さ い ほほ いた
思ったりもしていた。父の平手が去って行ったあとの頬も痛かつ
たが、心もそれ以上に痛かった。

まいにち す こうこう ふゆやす はい
ぼんやりと毎日が過ぎ、高校は冬休みに入った。いつもなら、
がっこう おくじょう なが う ちゅうせんかん ぞうせんしょ わか
学校の屋上から眺める宇宙戦艦の造船所とはしばらくお別れだ
おも さび きも たび なに かん
と思うと、ぽっかり寂しい気持ちになるのに、この度は何も感じ
ない。まるで心にシャッターを下ろしてしまったような感覚。か
い じぶん から と なに
と言って自分の殻に閉じこもってしまっているわけでもない。何
こころ よ どころ ひっし さが よう
か心の拠り所になるものを必死に探している様で、アクセルを
ふ ふ に かんかく
踏みながらブレーキも踏んでいるのとよく似た感覚。

よてい な ちち しゅっकिन はは さいまつ
予定の無いクリスマス・イヴ。父は出勤、母は歳末バーゲンに
で か いもうと ゆうじんたく
出掛けている。妹は友人宅でクリスマス・パーティーをするら
きょう ゆうがた だれ かえ どうきゅうせい おお だいがくじゅけん
しい。今日は夕方まで誰も帰らない。同級生の多くは大学受験に
む さいご お こ ちゅう ひま
向けて最後の追い込み中。暇。

こんな日を待っていた。誰にも邪魔されることなく、ゆっくり
とあれを読める日を。約200年前に先祖が書き遺した夢の書物を。
マスター・チップは母がどこかに隠してしまったが、コピーが母の
パソコンの中に残ったままだということは知っていた。母は自宅
のパソコンにはロックを掛けていない。絶好のチャンス。

初めて話を聞いたのは中学2年生の時。妹の双葉は
小学4年生だった。キッチンテーブルに二人並んで座って学校
の宿題をしていたら、夕食の支度が一段落した母がエプロン姿
のまま二人の前に座った。

「……これ、今から200年ぐらい前の代のおばあちゃんが書き遺し
たお話が入ってるのよ。二人ともそろそろ話が分かる年頃にな
ってきたから教えておこうと思うって……」

母はカプセル型のペンダントを首から外して二人の前に差し出
した。カプセルを開けると中にはチップが入っていた。チップを眺
めながら母は話を続けた。

「7代か8代ぐらい前のおばあちゃんなのかな……。SFアニメが
大好きだったんだって。一番好きになったのは宇宙戦艦が出てく
るSFアニメで、乗れるものなら本当に乗りたいと思ったらしいん
だけど、当時はまだ空想上の乗り物だったんですって。そこで、
そのおばあちゃんが考えたのは、自分の遺伝子を持つ未来の子ど
もたちにその夢を託すことだったの。ひいちゃんとふうちゃんのお
おばあちゃんの時代ぐらいまではロマンのある話だってことで
受け継がれてきたんだけど、お母さん、どうしようか迷ってて……」

このおばあちゃんの夢、今の時代なら叶えられる夢だけど、ひいちゃんにもふうちゃんにも行って欲しくないし……。だけど、そんなことがあったんだってことだけは話しておこうと思って…」

妃斗葉はあの日の母の複雑な表情を思い返しながら母のパソコンのスイッチを入れた。その指先は少し震えていた。母が大切に育ててくれた、温室の様な、楽園の様な、この安全で温かい、心地良い居場所を、自分はわざわざ飛び出そうとしている。

書物のコピーはすぐに見付かった。もっと複雑な階層の奥に隠してあることを想像していたが、意外にも一番上の階層に無防備に置かれていた。母は妃斗葉がこうするであろうことを分かっていたわぎとすぐ見付かるような場所に置いたのか……。それとも母が普段からこの書物を読んでいるということなのか……。

妃斗葉は早く読みたい気持ちを抑え、書物のファイルを自分のチップにコピーした。母のパソコンの電源を落とし、早足で自分の部屋に飛び込んだ。

書物はくこの冊子を手にとってくださった皆さんへ」というタイトルで書き始められていた。

(『冊子』って、紙で作られてたってことなのかな……)

妃斗葉は学校で古典の時間にしか聞くことの無い、『冊子』という言葉が自分の目の前にあることにちょっとした感動を覚えた。よく分からないけれど、『冊子』という言葉だけで長い歴史を感じてしまう。今は小さなチップの中に電子記録されているこの書物

は、200年前は紙媒体の書物だったのらしい。

さっし て と みな
 <この冊子を手を取ってくださった皆さんへ>

さっし きょうみ も
 この冊子に興味を持ってくださってありがとうございます。

わたし こ ころ み うちゅう せかい あこが
 私は子どもの頃、テレビのSFアニメを観て宇宙の世界に憧
 ねん う ふつ う ちゅうかんけい し ごと
 てきた、1972年生まれの普通のおばさんです。宇宙関係の仕事に
 つ あこが いだ じんせい ある
 就きたいという、ぼんやりとした憧れを抱いて人生を歩いてきま
 した。

う ちゅうかんけい し ごと い さまざま ぶん や し ごと
 宇宙関係の仕事と言っても様々な分野の仕事がありますが、
 わたし こ ころ あこが う ちゅうせんかん じょうむ
 私が子どもの頃に憧れていたのは宇宙戦艦での乗務です。

いちばん す う ちゅうせんかん かつやく はなし
 一番好きになったSFアニメが宇宙戦艦の活躍するお話でした。

どうじ わたし さいぜん ご ころ まえだんかい う ちゅう
 当時、私が35歳前後になる頃にはその前段階の宇宙ステーション
 かんせい はなし こ ごころ たの
 ンが完成するだろうという話があり、子ども心にワクワクし、楽

できあ う ちゅう
 しみにしていましたが、いざ出来上がった宇宙ステーションは、
 えら いちぶ う ちゅうひ こうし い ぼしょ
 選ばれた一部の宇宙飛行士だけが行くことのできる場所で、その

きよじゅうくうかん せま ふ じゅう わたし こ
 居住空間は狭くて不自由なものでした。おそらく、私が子ども
 ころ み で よう う ちゅうせんかん げんじつ
 の頃に観たSFアニメに出てきた様な宇宙戦艦が現実のものにな
 なが ねんげつ か
 るまでには、まだまだ長い年月が掛かるでしょう。

さっし わたし ゆめ つ こ つぎ じだい かたがた つた
 そこで、この冊子に私の夢を詰め込み、次の時代の方々に伝え
 すこ わたし ゆめ ぐげんか
 ていくことで、少しずつでも私の夢を具現化していくためのお
 ちから か かんが
 力を貸していただけないかと考えました。

げんざい えん せいか し ごと たずさ
 私は現在、縁あって製菓の仕事に携わっています。そこで、
 う ちゅうかんきょう か し ごと かたがた せいか ぶん や さき なに
 宇宙環境下で仕事をこなす方々を製菓の分野から支える何か

でき かんが さっし て と
出来ればと 考えています。この冊子を手を取ってくださった、
じせだい にな こ なか うちゅうかんきょう か せい か ぎ じゅつ
次世代を担う子どもたちの中から、宇宙環境下での製菓技術の
けんきゅうしゃ うちゅう うちゅう おも
研究者、宇宙パティシエ、宇宙パティシエールになりたいと思
かたがた あらわ ぶん や げんじつ も た
う方々が現れ、この分野を現実のものとして盛り立てていってく
きぼう
ださることを希望します。

ねん がつ にな
2013年8月3日
さわむら まれ か
沢村 真礼花

さっし て と みな さっし
〈この冊子を手を取ってくださった皆さんへ〉というのは冊子
まえ が よう め とお うちゅうかんきょう か
の前書きの様だった。ざっと目を通すと宇宙環境下での
せい か ぎ じゅつ よう ほんべん つづ
製菓技術についてのアイデアの様なもの本編として続いていた。

うんめい し か し ひと し
(運命だ……。知らなかった……。お菓子の人だったなんて知ら
り こうけい ひと か がくしゃ ひと
なかった。理工系の人だったんじゃないの？ 科学者みたいな人
わたし あ
だったんじゃないの？ あれっ？ 私、合ってるよ……。ちゃん
えら わたし うちゅう ねんまえ
と選んでたよ……。私、宇宙パティシエールになる。200年前の
のこ ゆめ いま わたし かな ぜったいかな
おばあちゃんが遺した夢を、今、私が叶える!! 絶対叶えるか
ら!!)

ひ と は む が むちゅう じぶん
妃斗葉は無我夢中で自分のパソコンにファイルをコピーした。
みやじまちゅうぐんせい か だいがく しんがく き いらい なん
宮島 宙 軍製菓大学への進学が決まって以来、何だかすっきりしな
すべ ふ と じぶん いし
かったものが全て吹き飛んだ。自分の意志ではどうすることもで
なに おお ちから つつ きぶん
きない、何かとてつもなく大きな力に包まれているような気分だ
からだ じゅう いま ほんべん よ すず
った。身体中がぞくぞくして、今は本編を読み進めることはでき

なかった。

ふ し ぎ おも なん だい まえ か の こ
不思議に思っていた。何代も前のおばあちゃんが書き遺した、
う ちゅうせんかん じょう む ば か ゆめものがたり な ぜ
宇宙戦艦に乗務したいだなんて馬鹿げた夢物語が何故これま
たいせつ う つ ば か ゆめものがたり
で大切に受け継がれてきたのか。ただの馬鹿げた夢物語ではなか
しょうつ せい か かん がくじゆつてき しりょう
ったからだ。この書物には製菓に関する学術的な資料としての

い み ねんまえ せい か ぎ じゆつ
意味もあったのだ。200年前にどのような製菓技術があったのか。

しん ぽ きたい ほってん
どのような進歩を期待したのか。どのような発展をしてきたのか。

ふ し ぎ おも わ こ う ちゅうせんかん の
不思議に思っていた。我が子を宇宙戦艦に乗せたくないのなら、
な ぜ は は しょうつ こと じぶんたち はな だま す
何故母は書物の事を自分達に話したのか。黙っていればそれで済
な ぜ まよ じぶんたち はな
んだのに、何故迷いながらも自分達に話したのか。

つた しりょう かん な こと
伝えていくべき資料だと感じていたからだ。無かった事にする
かん は は まよ
べきものではないと感じていたからだ。だから母は迷いながらも
ひ と は ふたば つな
リレーのバトンを妃斗葉と双葉に繋げようとした。

ふ い はい ご けはい かん
不意に背後に気配を感じた。

し は は しんばい め やさ くちもと
「もう知ってるよね」母が心配そうな目で、けれど優しい口元で
ほほえ
微笑んでいた。

は は しょうつ なに か まえ し
母はこの書物に何が書かれているのかをずっと前から知ってい
ちち し ひ と は みやじまちゅうぐんせい か だいがく
た。父もきっと知っていたのだろう。妃斗葉が宮島 宙 軍製菓大学
しんがく い だ と き いったい きも
に進学したいと言いだした時、一体どんな気持ちだったのだろう。
お すべ じしょう うんめい つな
これまでに起こってきた全ての事象がこの運命に繋がっていた。

は は ひ と は ほう ちい きんいろ つつ さ だ ぎん
母は妃斗葉の方に小さな金色の包みを差し出した。銀のレース
か
のリボンが掛かっている。

き い
「ひいちゃん、メリー・クリスマス。気に入ってくれるといいん

だけど……」

包みの中はカプセル型のペンダントだった。母が持っているの
と同じブランドのデザイン違いだった。合金製で神秘的な彫刻が
施されている。

「後でマスター・チップも渡すわ。ひいちちゃん、真礼花さんの大事
な跡継ぎだもんね。お母さんもこれで肩の荷が少し軽くなるわ」

妃斗葉には、果たして自分にお菓子作りができるようになるの
だろうかという不安が残ってはいたが、学校側が「合格」という
意思表示をしてくれたのだから、きっと大丈夫に違いない……
という、若干強がりにも似た力が湧いてくるのを感じた。

どれだけ科学が発達しても、本当に天国というものが存在する
のか、仮に存在するとして、その魂は200年もの間変わらずそ
こに居るのか、分からないことばかりだ。だが、妃斗葉は真礼花に
見守られているような、何か温かい気配を感じていた。

